

# 上田市立第三中学校

保健体育 1 学年

単元名 もちブルバスケット

授業者 山本 陸也 (上田市立第三中学校)

指導者 上原 雄次 (東信教育事務所指導主事)

## 1 本時の主眼

得点率が上がる作戦を考えた生徒たちが、自他の動きを動画で確認し、分析する場面で、高い視座の動画を見ることで空いている空間をどう作ったり、どう活用したりすることがよいかを相手の行動をふまえた視野で考えることができる。

## 2 視聴覚機器の役割

下記の2つを用いることで、空間の使い方や個々の動きについて共有し、考察しやすくするための手だて

### ドローンの活用

ドローンの映像により視座が変わることで、個々の動きや立ち位置など空間の使い方に対する見方・考え方の視野を広げることができる。



### スプレッドシート



試合後の気づきや個々の学びを全体で共有することができ、次の活動の見通しをもつことができる。

## 3 授業の概要

### 学習問題

ゴール前の空間でパスを受け、フリーでシュートするにはどうしたらよいか。

- ・空間を作り出すための動きについて確認する。
- ・作戦盤や動画を使ってチームで動きを確認する。

### 学習課題

得点率を上げるために必要なことを空間に注目して考えよう。

- ・チームで前時の作戦を確認し、試合で実践する。
- ・ドローンで撮影した動画を視聴し、個々の動きのよさや課題、フリーになる空間の作り方などを見出す。
- ・個々の気づきをスプレッドシートに入力し、大型スクリーンに投影して、全体共有を行う。
- ・動画で気づいたことを自分のチームで検討し、新たな作戦を話し合い、実践する。その際、クロームブックで試合を撮影し、試合データを蓄積する。

## 4 研究会の要点

**討議の柱①** ドローンを活用した授業構想がゲームの分析や作戦を立てる上で効果的だったか。また授業の内容に適した活用だったか。

・視野が広がるため作戦を立てる上でドローンの有効性は非常に高い。

・ドローンの映像によって、コート全体を俯瞰し、自分の動きを客観的にとらえて、試合に適した動きだったか、生徒自身が判断することができた。また、空いたスペースを生み出すための予備動作として、どんな動きが必要なのか、ディフェンスだけでなくオフェンスの意識も働かせながら作戦を考える姿が見られた。



**討議の柱②** 全生徒一律にドリブルを禁止し、5歩までの移動可能というルールは全員が参加しやすいゲームを実現する上で、効果的な手段となっていたか。

・技能的に難しいと思われる生徒は、3×2だとボールに関わることができていた。また、シュートとパスの動きだけなので仲間の動きを見て、自分から動き始める姿があった。

## 5 指導者の助言

・ICTの活用が子どもたちの資質・能力の育成につながったか。本時の授業では、ドローンの映像によって、自分たちのプレーを俯瞰することで、新たな気づきと学習意欲が引き出され、思考しながら運動することができていた。

・Aさんは最初、作戦のイメージが仲間とあまり共有されないうまま動き出していた。しかし、ドローンの映像を見た後、「ゴール下やディフェンスで空いている所に動けばよい」と学習課題である空間の視点に気づき、スプレッドシートに記述した。その後、チームで作戦を立てる場面では、積極的に自分の意見を語ることができた。映像によって具体的なイメージが生まれ、ゲームの分析や試合での実践、プレーの楽しさを味わうことができた。わからないことがわかる、できるということが、ドローンで俯瞰的に見ることで本時の学びにつながった。

## 6 今後の課題

・単元配列や授業展開のどこで、どんな知識・技能を身につけ、学びに向かう人間性を育てていくのか。3年間を通して、どこを教材化し、ICTを活用していくのか検討の余地がある。

・クロームブックでの動画の蓄積は、前時と本時、単元の始めと終わりを比較し、自己の学びや変化を見つめることにつながる。子どもたちがわかったことを積み上げ、自由に取り出すことができるよう活用したい。